関西国際大学研究紀要　第18号，2017年，71－81

（研究ノート）

教室での学習と実習の組み合わせによる教育効果に関するケーススタディ
－Nの成長－

A Case Study of the Educational Effects of Combination of Classroom Study and Practical Training：the development of student N

石　川　夕起子＊
Yukiko ISHIKAWA

Abstract

The changes in consciousness and competency of young Japanese have caused some problems. Their self-esteem, which is much lower than that of other countries, is one of social problems at present. Motivation of spontaneous action is expected to raise self-esteem. This paper analyzes a case of a student who has four-year experiences through classroom studies and practical trainings and examines how the student has developed. As a result, it can be said that combinations of classroom studies and practical trainings is effective. Student learn how to use their knowledge in the training, and their failure in the training enables them to analyze the cause and find the solution in the classroom. And then in the next training students can overcome the similar problems. These can be said to be very effective cycles.

In this case study, a student, N, developed her skills in the KUIS curriculum which is carefully planned to combine study and experiences. The programs brought out her possibilities and developed her skills. She overcame her problems in the trainings and the success increased her confidence. The combinations of study and experiences are important because students realize their own abilities and learn how to adapt to the circumstances.

Ⅰ　はじめに

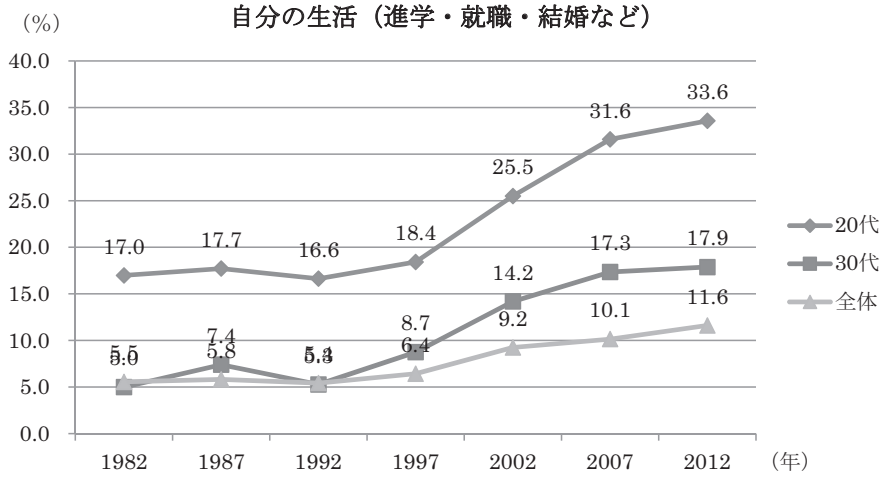
近年，若年層の行動特性や意識の変化が，教育現場や各種メディアでもとりざたされている。とりわけ他国と比較される若年層の自己肯定感の低さは，社会的な問題となっている。内閣府「国民生活に関する世論調査」でも，「経済成長率の低迷や失業率の上昇等，厳しい経済状況を経験する中で，現在の若年層の間では，以前と比べ，自らの将来に不安を感じる者が多くなっている」

＊　関西国際大学人間科学部

とある。若年層，とりわけ学生においても，自発的な行動意欲は自己肯定感の高まりに影響するのではないかと思われる。関西国際大学（以下，本学）のカリキュラム（科目群）のストーリー性のある展開をもとに，教室内での座学で得た知識を活用する機会を多くつくること（教室外学習・体験プログラム）を重視してきた筆者が，Ｎさん（人間科学部経営学科卒業）の大学在籍４年間のケースを通して，座学と教室外学習（現場演習）の往還による様々な経験の中で，どのように影響を受け，心の変化を感じるきっかけとなり成長したのかを検証していくものとする。

そのために，まず若年層の意識・行動特性について，身近な会話の中で，あるいはメディアなどでも多く取り上げられている傾向について，内閣府が公表している世論調査（2013年）の調査項目を検討する。図表１から，経済面や，進学・就職・結婚など自分の生活上の問題について悩みや不安を感じている者の割合は全年齢で高まっているが，特に若年層世代では他の年齢層を上回る高まりを見せていることがわかる。

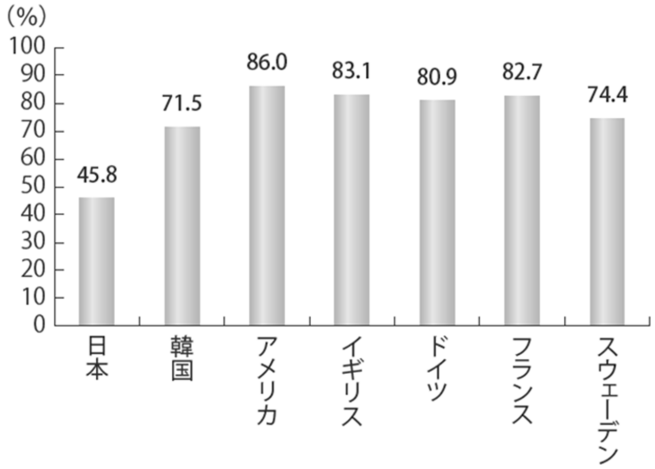
図表１　「若年層世代の不安感の変化向」
自分の生活（進学・就職・結婚など）



出典：国土交通白書2013より筆者が作成
（http://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h24/hakusho/h25/）

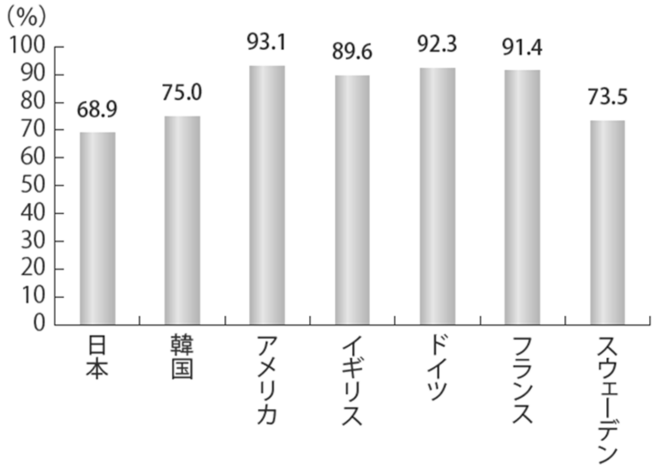
また，自己肯定感に関しても，同じく内閣府の特集「今を生きる若年層の意識～国際比較からみえてくるもの～」で，日本を含めた７カ国の満13～29歳の若年層を対象とした意識調査（我が国と諸外国の若年層の意識に関する調査（2013年度））の２項目「自分自身に満足しているか」（図表２　「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の回答したものの合計）「自分には長所があるか」（図表３　「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の回答したものの合計）の結果からも，他国に比べて日本の自己肯定感の低さが見えてくる。

図表 2　自分自身に満足している



出典 : 内閣府の特集「今を生きる若年層の意識〜国際比較からみえてくるもの〜」
（http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26honpen/pdf/tokushu_01_01.pdf）

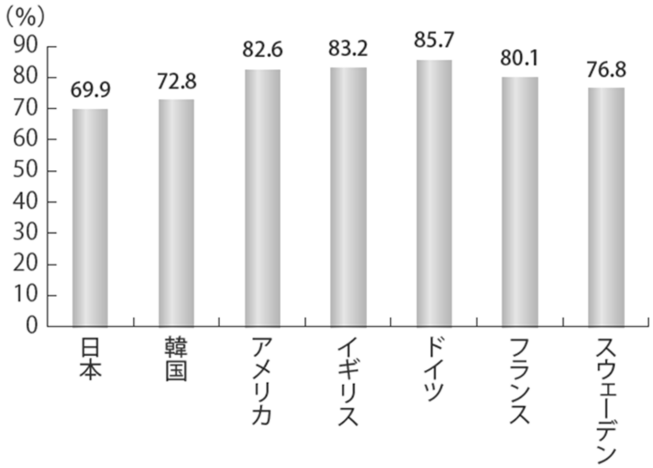
図表 3　自分には長所がある



出典 : 内閣府の特集「今を生きる若年層の意識〜国際比較からみえてくるもの〜」
（http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26honpen/pdf/tokushu_01_01.pdf）

さらに，学校生活においての満足度でも，他国に比べて日本人学生の満足度の低さが気にかかるところである。（図表 4　「満足」「どちらかといえば満足」と回答したものの合計）

図表４　学校生活の満足度



出典：内閣府の特集「今を生きる若年層の意識〜国際比較からみえてくるもの〜」
（http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26honpen/pdf/tokushu_05.pdf）

以上，見てきたように若年層の不安感の高まりや肯定感の低さが明らかになった。その原因について筆者なりに考察すると，1990年代以降の日本の経済・社会の地盤沈下，あるいは国際情勢，社会・家庭環境が大きく影響するのではないかと思われるが，その考察は別の機会に譲る。

以下，一般論から導かれた若年層の自己肯定感の低さについて，それを乗り越えるきっかけを提供した事例について，筆者の担当する学生をモデルとして考察する。そのためにカリキュラムの概要を説明する。

Ⅱ　経営学科ブライダルコースの授業科目と体験型（授業外）プログラムの関連

本学人間科学部経営学科（以下経営学科とする）では，学生は１年次のうちに経営学概論や経済学，マーケティングやファイナンスなど経営学の基礎知識を学び，１年次の終わりにコース選択を行う。入学時の希望コースを尊重しながら，それぞれの興味のある分野で経営を学ぶ。コース科目担当教員の授業から得た内容をもとに，改めてコース選択を行う。

ブライダルコース科目では，座学と体験型の授業を取り入れている。まず，座学では，セレモニー産業論（２年春），ウェディングプランナー論Ⅰ（２年秋），セレモニー産業特論（３年春），ウェディングプランナー論Ⅱ（３年春），ブライダル産業論（３年秋）があり，体験型では，業界研究実習（１年冬），キャンパスウェディング（２年夏），インターンシップⅠ・Ⅱ（２年・３年），その他授業以外にも学生の自主的な活動として「Wedding Lab.」というサークル活動を行っている。その活動として，学生プロデュースウェディングや産学連携のイベントなどで学外に積極的に出る機会を設けている。

これを図表５にまとめた。

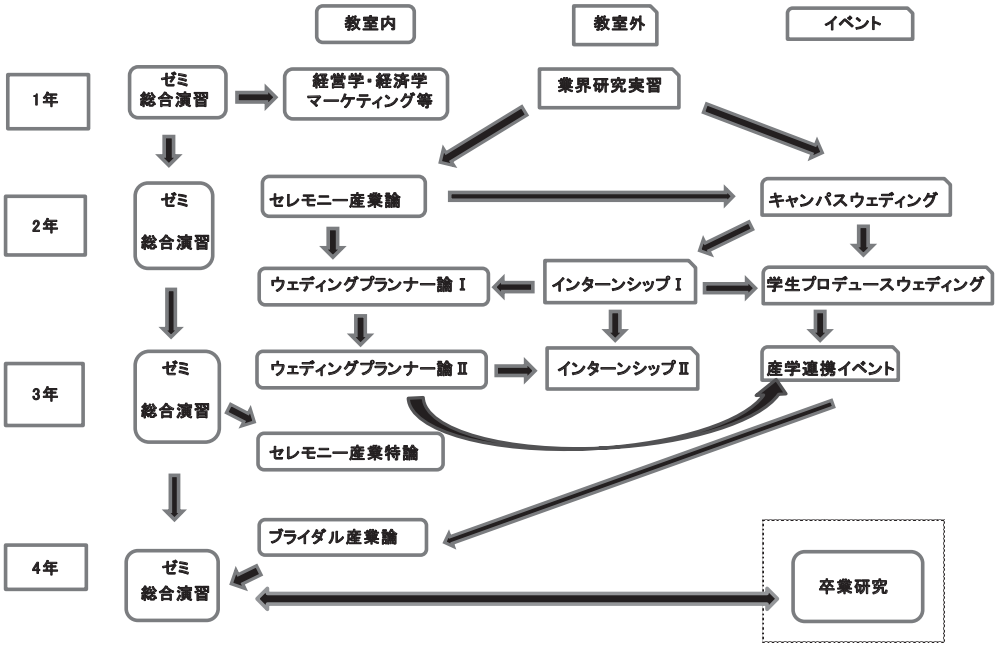


図５　授業科目間連携（座学と現場実習の流れ）筆者作成

学生は入学から，座学と体験型学習を上記の流れで学習し，知識と経験値を高めていく。それぞれの科目で，グループワークやペアワークなどのアクティブラーニングに取り組み，コミュニケーション力を養う。またリサーチした内容などについてPCを駆使しまとめ，プレゼンテーションの資料に仕上げ，プレゼン練習を繰り返し行い，学生間の相互評価，教員からの評価を踏まえて振り返りを行う。この科目間の連携，ストーリー性を重視した科目配置により学生たちがどのように成長し，卒業後に社会で活かすことができているのか，Ｎさんの場合をケーススタディとして検証していく。

Ⅲ　経営学科卒業生の事例

本学経営学科２期生であるＮさん（ウェディングプランナー志望で経営学科に入学）の入学前は，必ずしも自己肯定感が高いとは言えない不平・不満をよく口にする学生であった。本学の学びの中で大きく成長し自己肯定感を高めて卒業した当該卒業生の成長を筆者はコース担当教員として教えアドバイスをし，時には激励し観察してきた。自己肯定感が大きく変化した当該卒業生をケースとして，本学の教育プログラムが学生に肯定的に影響を与えていることを明らかにしたい。

過去の観察に基づく仮説について，当該卒業生に電話インタビュー（90分）で確認し，その内容を踏まえてまとめる。

１．座学の授業科目について

１年次の授業は，座学が基本である。経営学科の科目として，経営のベースとなる必修科目を

中心に教室内で学んでいくが，それに対してはどうであったか。
N：もともと4年間でじっくり学びたいと入学したので，1年次に経営のベースとなる知識を学修したことは自分にあっていた。アクティブラーニングやプレゼン発表の機会が多く，その経験は今に役立っている。例えば「SWOT分析」など常に手法として現在も使えている。広告を担当する際，自社の強みや弱みを知り，社会や取り巻く環境，競合他社など，整理や判断がスムーズにできていることに気づく。ターゲットによって，掲載写真を変えることや，大学で経営を学んでいたからこその判断で，職場でも評価してもらえ，大学の学びが生かされていることを実感する。

2．業界研究実習

1年次の冬，コース決定をした学生はそれぞれのコースに関連する業界で，2年次からの専門性を活かした学びの前に業界に触れ，業界を知る教室外の体験型学習を行う。ブライダルコースでは，ホテルや邸宅，専門式場などの会場，写真や美容，衣裳などのブライダル関連会社を訪問し，模擬挙式を行うなどを通して，現場のスタッフとのコミュニケーションをとる貴重な機会である。教室外学習のスタートとなる業界研究実習ではどんな学びがあったか。

N：経営の知識を学んだ上で，初めて業界に触れる機会であった。さまざまな業態やいろんな施設をみることで，ブライダルと一言で言っても，職種・それぞれの思い，プランナーがどういう位置にいるかがよくわかった。自身の一番の転機は，この業界研究実習での「花嫁体験」であった。業界最大手のワタベウェディングでの和装体験を勧められたときは「したくない！絶対嫌だ！」という思いしかなかった。その原因は，小学・中学時代から，注目されることで傷つくことが多かった時代を過ごしたからで，できるだけ目立つことを避けてきたからである。その中で花嫁体験は，派手な衣装をきて人前に立つというだけでも恐怖であった。それなのになぜ体験したのかであるが，着るきっかけは，「プランナー希望であるなら，衣装を着てみるというのは，何より花嫁の気持ちがわかる体験ではないか。」と指導を受けたからであった。だが当日は，休んでしまうのではないかと思ったくらい大きな決断であった。しかし当日，休まずに行った自分がそこにいた。和のメイクをして頂き・かつらをつけ，花嫁衣裳である色打掛を着た時には，「準備して頂いているとき，撮って頂いているとき，これがプロか！と思えた。こんなに楽しい気持ちにさせてくれる人たち，すごいと思うと同時に，花嫁はこんな気持ちなんだ！楽しかった！やってよかった！」と体験したから言えたとわかった。準備自体が楽しくなるようにこんなにまでしてくれることを，自分もプランナーになってこんな気持ちにさせてあげたい。ブライダルに関わりたい。それならお客様と一番近くにいられて準備が出来るところで手伝いがしたいと，自分自身が大きく変わった実習であった。

3．インターンシップ

業界研究実習の体験をもとに，エントリーしたインターンシップは，希望する業界に出る初めての体験であるが行く前と行った後の変化はあったか。

N：業界研究実習に行った中で気になっていた，神戸北野の異人館サッスーン邸をインターン

シップ先に希望した。従来の夏の10日間ではなく，繁忙期である10月の提案を頂き，現場でいろんなことをさせて頂く事にした。自分自身は，もともとありきたりな結婚式場でありきたりな結婚式をしたくないと考えていた。異人館の邸宅は，結婚式場として作られたものではなく，もともとの歴史のある建造物であり，こんなところなら，結婚式をしたいと始めて思った，自分の考えが変わった場所である。業界研究実習ではわからない時間を一緒に過ごし，例えば支配人とスタッフの空気感を目の当たりにし，こんな会社に入りたいと思った。

4．キャンパスウェディング

2年次に初めて学ぶコース科目であるセレモニー産業論では，業界の歴史や慣習，様々な業種企業や職種を理解する内容と，大学内でホンモノの結婚式を学生が企画実行をするというイベントを2年生が中心に行う内容とが含まれる。イベントの企画・立案・実施において，カップル公募のための告知から選考，結婚式の準備，当日の進行までやり終えた後の学びは何か。

N：2年になりコースの専門科目を始めて学ぶ「セレモニー産業論」の成果発表がこのキャンパスウェディング実行である。カップルの公募から選考，チラシやポスターつくり，広報のために新聞取材依頼など，ウェディング知識はまったく何もわからなかった中で夢中でやり遂げ，カップルとは今でもコンタクトをとっており，満足頂いたとはいえ，今振り返れば，「もっと提案できたのではないか，もっとしてあげられることがあったのではないか，もっとこうすればスムーズにできたのではないか，もっとスキルがあったら，今ならもっと安心させてあげられたのではないか。」など悔しい思いがある。ただ，苦労したことはわからなかったことだったとわかり，今の仕事では，花嫁のタイプにより，案内方法も変える工夫をしている。例えば，言わない新婦，いえない新婦にはメールでフォローしたり，次につなげたり，タイミングをみたり，電話をしたり，「察する」ということを考えることができた。これは経験値だけではないと思った。

5．エクラフェア

本学と小野市との産学連携事業の一環として，コース学生と小野市にあるエクラホールの立ち上げに携わったが，学びはあったか。

N：産学連携イベント，「エクラブライダルフェア」の実施では，集客に苦労した。いろんなパートナー企業と協働するという貴重な体験であった。フェアのためにブースでお客様に自社商品を案内することの難しさと，パートナー企業の方々の協力の有難さとその重みが今になってわかる。米粉で作ったバウムクーヘンを担当したが，今では，プランナーとしてその商品をお客様に実際に提案し喜ばれている。実践できている今があることに，あの体験があったからこそと感謝している。

6．アルバイト

N：インターンシップ中に，受け入れ先企業からアルバイトの声をかけて頂いたことは，嬉しかったが，行きたい気持ちと，どれくらい続けられるかわからないことで迷った。プランナーの職業に対して憧れはあるが，仕事を知るにつけ，責任重大すぎて，自分に勤まるかの自信がなかっ

た。大学時代，いろんな経験をつみたいと，アルバイトだけでもハンバーガーショップやラーメン店，塾やテーマパークなどを続けた。就職を視野に入れる時期も，ぎりぎりまで迷ったのは，やはりウェディングの責任重大さが怖かった。いろんなアルバイトを経験した中である程度のことは出来ると自信を持ってきてはいたが，サッスーン邸の魅力的な場所で，「失敗をしたらみんなに迷惑がかかる。好きな場所を傷つけたらどうしよう。」と，もともとの自分の責任感の強さゆえの臆病さに随分悩んだ。その中でやっぱりここだと思った理由は，お金ではなく自分が頑張れると思える場所でないと続けられない，サッスーン邸のプランナーがやりたい！」と2年半のアルバイトを経て思えた。

7．大学案内・表紙，看板

本学では毎年，学内の学生が大学案内のモデルを務めている。容姿だけでなく，その表情，普段の行動など学科推薦によりモデルに抜擢された。当該学生の姿が学内外で大学の顔として広報活動に一役買っていた。

N：人前に出るのが苦手な自分が，「挑戦してみないとわからないことがある。」と受け入れたのは，大学案内の表紙を飾ったことや，ポスターや看板のモデルになったこと。

「チャレンジしないと見えない景色がある！」と学んだのは，業界研究実習だった。その行動力は今の接客につながっている。新規接客のとき，いろいろ提案してみることを知った。背中を押して欲しい人かもしれない。自分もそうだったように。背中を押す役割も大事だと今に生きている。

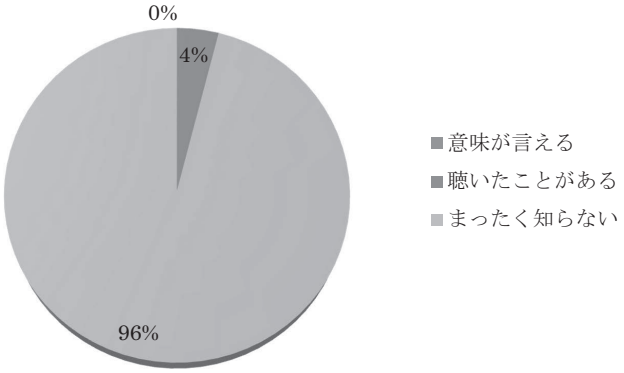
駅の看板は，親戚がすごく喜んでくれた。JRまで見に行ってくれたり，久しく会ってなかった小中の友達からもアクションがあった。無理だというのは簡単だが，やればいろんなことにつながるということを知った。人・実践・気づき・環境・学び，すべてにおいてこの大学に来てよかったといえる。

以上のヒアリングから，当該学生は，教室内で学ぶ知識と，教室外の体験の中から様々な苦労を乗り越えながら，達成感や喜びを見出し，自己実現に向けて歩んでいたことが伺える。その中で何が必要であったか，当該学生の言葉の端々から伺える「ホスピタリティ」について述べていきたい。

Ⅳ　ホスピタリティ

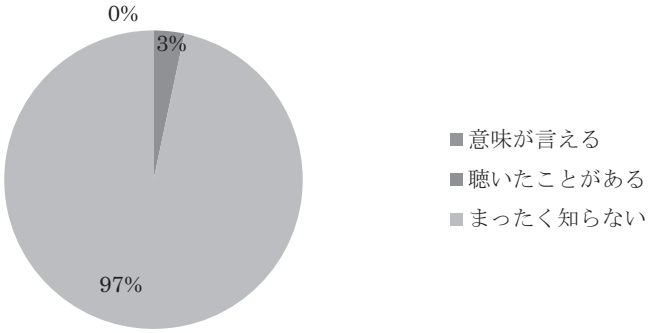
東京オリンピック誘致が決定した際，「おもてなし」という言葉が，流行語大賞にもノミネートされた。企業に求められる人材としても，「ホスピタリティ」要素が強く求められる時代となったが，2013年に，高校生を対象に2箇所でリサーチした結果，「ホスピタリティ」という言葉の認知はまだ僅かであったことがわかる。

図表 6　ホスピタリティの認知（高校生）①
ホスピタリティとは（夢ナビ講義（2016年）受講者の認知



筆者が，講義終了時に取ったアンケートより作成

図表 7　ホスピタリティの認知（高校生）②
ホスピタリティとは（マイナビ講義（2016年）受講者の認知



筆者が，講義終了時に取ったアンケートより作成

社会で求められる「ホスピタリティ」だが，若年層がその言葉に触れるのは，多くは大学であると推定される。日本では，ホスピタリティに類似する言葉として，「饗応，接待，歓待，厚遇」と相応し，それゆえ，ホスピタリティという用語には「客人・旅人・患者を手厚くおもてなしするための形・心の関係性」[1)] という定義がある。

図表 8　ホスピタリティの研究領域の類型化

広　　狭	概　　要
行為の実体性（狭義）	マナー，エチケットを含め，立ち居振る舞いにおける接客スキルを専ら研究対象とする。それは思いやりの行為があるか否かを問う。
精神的関係性（広義）	もてなす（ホスト）側ともてなされる（ゲスト）側との双方の満足度を求めつつ，ビジネスの視点から精神的関係性の重要性を問う。
環境共創性（最広義）	モノ（空間）・コト（時間）・ヒト（人間）という広い寒天，とくに地球全体の共存共栄や環境との共創がなされているか否かを問う。

出典：山上徹「ホスピタリティ・ビジネスの人材育成」p.17より，一部修正。

学生にとって，「エチケットやマナー」の重要性は，家庭教育の中でもはぐくまれてきているが，「ホスピタリティ」という言葉の理解は，サービス業でのアルバイトやインターンシップなどで学外に出る前の事前授業などで深く触れることになる。社会で求められるものと大学で学ぶものとが結びついていることが必要である。筆者も，ホスピタリティは人間力として社会でも問われ，求められるものとして，その重要性について指導してきた。

Ⅴ　終わりに

高校時代まで，消極的で，人前に出ることが苦手だったNさん。多くの学生が，「早く専門的なコースの学びをしたい。」と希望する中で，Nさんは4年間をかけてじっくりと経営学を学びたいという明確な意志をもっていた。それは，高校3年生のときに本学オープンキャンパスを訪れた際，プランナーになりたいと告げた意志の強さに似ていた。座学では新たな知識の習得を，その知識をいかに知恵に変えていくかということの大切さを伝えてきたが，業界研究実習で花嫁体験を拒否するNさんに驚いた。多くの学生が，花嫁衣裳を着る体験は憧れであり，喜びであると認識していたからである。Nさんが，過去の嫌な体験から，人前に出ること，あるいは目立つ行動を控えていたことを聞き，伝えたことは，花嫁体験の目的と意図である。Nさんの将来の夢がウェディングプランナーである限り，花嫁の一番近くにいるプランナーが花嫁の気持ちを理解することの大切さ，その絶好の機会を掴むのか手放すのかどうか，自身で選ぶことを助言した。

普段の授業から，指示ではなく自分自身で決めるということを繰り返し行っている。「やらされた感」ではなく「やった感」，その結果生まれる自己肯定感は，自身の決定により大きくなると考えている。花嫁体験をする前とした後の変化は，プロにみた「ホスピタリティ」であると考える。「ここまでしてもらい感動したことを，今度は自分が誰かにしてあげたい。」という想いは，まさにホスピタリティが育まれたた瞬間であるといえよう。そこからNさんは，「目立つこと」という事柄が，「役に立つこと」という認識に変わって行く。教室の中で学んだアイデアの拡散と収束，分析の方法などを，実習でどんどん活用して行った。例えばインターンシップでも，なりたい自分をイメージし，アルバイト，就職へと繋げていったことは，学生でありながらも「自身のできる精一杯でおもてなしを」の精神で次々と実践していく。例えばひとつの例をあげるとウェディング業界では土日が繁忙期であるため，好きなライブに行けないということの解決案として，そのウェディング会場にミュージシャンを呼ぶイベントを開催したのである。学生の一意見を受け入れてくれた会場も素晴らしいが，実は実現させた後には思わぬ出来事が待っていた。それはそのミュージシャンが，結婚式のサプライズゲストで登場し会場を喜びの渦に巻き込んだり，またそのミュージシャンのファンが，その会場でウェディングを申し込んだりと，まさにホストにもゲストにも会場にもプランナーにも嬉しい出来事であった。普段からの「可能性をみつける」ということを授業で繰り返し行ってはいたが，アルバイト生でありながら実践したことは，プランナーとなった今に活かされていると言う。

本学のプログラム，大学4年間の座学と現場実習の往還の効果は自己肯定感を高め，ホスピタリティを求める社会に羽ばたく学生たちの準備段階として有効であると考えられる。今後も学生の可能性のスイッチを学生自身が入れることができるようサポートしていきたい。

【引用文献】
1）山上徹：「ホスピタリティビジネスの人材育成」　白桃書房　2012年 p.15

【参考文献】
・本郷富士子：「情報化時代の人材育成」総合労働研究所　1987年
・奥田健二：「新時代の人材育成」日本労働研究機構　1990年
・澤田淳：「プロフェッショナル人材育成」総合法令出版　1999年
・日本経営教育学会：「経営の新課題と人材育成」　学文社　2001年
・福島正伸：メンタリングマネジメント」ダイヤモンド社　2005年
・小方直幸：「大学から社会へ」　玉川大学出版部　該当ページ　2011年
・吉井妙子：「女子の〈底力〉の引き出し方」　フォレスト出版　2012年
・加藤友康：「経営者が欲しい，本当の人材」　ワニブックス PLUS 新書　2013年
・橘木俊詔：「実学教育改革論」　日本経済新聞出版社　2014年
・認知行動療法教育研究会：「こころのスキルアップ教育の理論と実践」2015年